



Careoth People Stories

CAREOTH PICKS

 VOL
25
2026

遊びが学びに変わる！

現場発！オリジナル療育アイテム開発秘話



木の棒にストローを通し、その上にポンポンを乗せていく

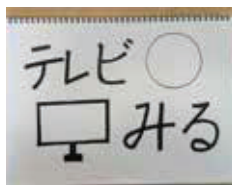


はい！はい！」手をあげる子どもたち

アイテム② キャラクターと一緒に助詞の理解アップ！ 【助詞クイズ】

制作：松木紫帆（夢門塾ゆうゆう高木2組）

文章の助詞を○で隠し、選択肢から正解を選ぶことで、楽しみながら助詞の理解や語彙力を育む「助詞クイズ」です。子どもたちに親しみのあるキャラクターを登場させ、自然と問題に引き込まれるよう工夫しています。簡単な問題から徐々に難しくなるステップアップ式で、挑戦する意欲も向上。わざと違う助詞を選んで生まれるおかしい文章に笑いが広がることも魅力です。今後は身近な素材を活用し、色覚や視空間認知能力を育む新たなアイテム制作にも挑戦します。



身近なものやキャラクターが出てくるのもポイント

木の棒にストローを通し、ポンポンを乗せて遊ぶカラフルな療育アイテムです。色を楽しみながら、指先の動きや目と手の協調、力加減、集中力を自然に育みます。集中や力加減が苦手な子どもたちのために、家倉先生が制作。職員がコツを伝え、根気よく見守ることで、最後までやり遂げた子どもには笑顔と大きな達成感が生まれます。職員同士でもアイデアを共有し、一人ひとりの個性に合ったアイテムづくりや、新しいスポンジバズルの制作にも挑戦しています。



カラフルな色合いも魅力的

アイテム① 指先の力加減や集中力をきたえる！ 「ストローポンポン」 制作：家倉寧々先生（児童発達支援 夢門塾相生）

「夢門塾」では、子どもたちが「できた！」という喜びを重ね、将来を生き抜く力を育めるよう、個性や発達に合わせた療育アイテムを活用しています。その中には、日々子どもたちと向き合う先生が、一人ひとりの苦手や成長に合わせて手作りしたものもあります。今回は、先生たちのアイデアと愛情が詰まった「手作り療育アイテム」を特集。各教室の工夫や制作に込めた想いとともに、遊びながら自然に学び、成長できる夢門塾ならではの取り組みをご紹介します。

アイテム③

お店で売っているカレンダーを自分の手で作る楽しさ！
「ポケットティッシュカレンダー」
制作：新田高史（無門塾ゆうゆう中寺）

夢門塾ゆうゆう中寺からは、施設オリジナルデザインのミニカレンダーが入ったまるで商品のようなポケットティッシュを、お仕事感覚で制作する活動を紹介。身近な実用アイテムを自分で作り、さらに完成したものが普段使いできるという点が、子ども心をくすぐる魅力となっています。楽しみが広がっています。

このポケットティッシュカレンダーづくりは、集中が難しい子どもにも意欲的に取り組める作業を探していた際、保護者の方から「カレンダーが好き」という声を聞いたことでした。そこからオリジナルのミニカレンダーを作り、広告用ポケットティッシュに入れるというアイデアが生まれました。活動を通じて目指すのは、将来的な就労支援につながる経験はもちろん、手指の動きや目と手の協調性、集中力そして自己肯定感の向上。ハサミで切る手間を減らす工夫や「1日10枚を15分で仕上げる」という作業量の設定など、子どもが意欲をもって取り組める配慮がされているのも印象的です。実際に取り組んだ子どもからは「学校にも持っていける！」と大好評。これまで集中が続かなかった子どもが30分以上作業できるようになったという嬉しい変化も見られています。

さらに今後は長機を使った「座ってできるテーブルホルダー」の作成も計画。低身長の子どもでも参加しやすいスタイルを検討しており、こちらも楽しみが広がっています。



集中して、ひとつ一つ丁寧かつスピーディーに



利用日を覚えられない子には、印をつける工夫もプラス

CAREOTH PICKS

利用者に寄り添うマッサージで心も体も解きほぐす

～ベテラン×若手が語る！「ゆうゆう」の鍼灸・マッサージの仕事～



鍼灸師
下井 洋人さん

鍼灸師
山崎 仁美さん

—— 鍼灸・マッサージの仕事に
就こうと思ったきっかけは？

山崎 私は1kg未満の未熟児として生まれ、幼少期は病院へ通う日々でした。父と祖母の病気をきっかけに出会った鍼灸で、私自身も元気を取り戻した経験から、困っている人を支えたいと鍼灸の道へ。接骨院や個人病院などで経験を積み、40歳でキャレオスに入社しました。

下井 高校時代、陸上部の練習中に腰を痛め、立つことも歩くことも難しくなりました。地元の鍼灸治療院で回復した経験から、自分もリハビリを支える仕事がしたいと専門学校へ進学。卒業後は新卒でキャレオスに入社し、今年で4年目を迎えます。

—— どんな仕事ですか？

山崎 利用者さんのご自宅や「ゆうゆう」、他事業所を訪問し、週1回・約20分の鍼灸やマッサージを行います。事前に体の状態を伺い、得意なスタッフが悩みの箇所を中心に全身をほぐします。体がゆるむことで、心まで前向きになれる施術を大切にしています。

下井 毎日約10人を担当し、体の状態や性格に合わせて施術しています。緊張で筋肉が硬くならないよう、楽しく会話しながらリラックスできる雰囲気づくりを心がけています。施設では、施術中の会話が利用者さん同士の交流につながることも大切にしています。

—— やりがいを感じるのどんな時ですか？

山崎 利用者さんには「私たちがついているから大丈夫。一緒に頑張りましょう」という気持ちで向き合っています。元気を取り戻す姿や「良くなってきたよ」という言葉が、大きな喜びと支えです。利用者さんやご家族に信頼していただけるよう、今も学び続けています。

下井 施術を通じて体の状態が改善し、利用者さんの表情まで明るくなっていくことに喜びを感じます。大切にしているのは会話です。「一人ひとりと丁寧にコミュニケーションを取りながら、心地よいことや苦手なことを見極め、その方に合った施術を心がけています。」

—— 心に残っているエピソードが
あれば教えてください。

山崎 認知症のある方が、施術中の会話をきっかけに本来の表情を取り戻されることがあります。「娘との架け橋になってくれる」と言われ、その想いをご家族へ伝えたことで面会につながったことも。心と体の両方を解きほぐせる、この仕事の尊さを実感しました。

下井 「ゆうゆう」で約2年間担当した方は、認知症が進んでも僕のことを覚えていて、会うと手を振ってくださいました。体が弱った時にも、声をかけると手を握り返してくれました。その反応から、施術を重ねる中で築いた信頼や心のつながりを感じました。

—— どんな鍼灸師・マッサージ師を
目指していますか？

山崎 喜んでくれる人がいる限り施術を続けていくのはもちろん「年だから」とあきらめている人たちに、「こういう方法があるよ」と地域のサロンなどで伝えていきたいです。下井くんのような若手を育て、次の世代にバトンをつなぐことも目標です。

下井 人の心に寄り添える施術者です。人間同士なので相性はありますが、例えば相性が悪くても寄り添う方法を考え、施術していく中で仲良くなっていきたいです。一期一会の出会いを大切にしていきたいですね。

施術のようす



CAREOTH PICKS

【後編】考え、挑戦し、助け合う。

3つの活動と園庭に込められた「大人が決めつけない」保育

前編では、子どもたちの主体性を引き出すランチルームの取り組みや、地域とのつながりについて紹介しました。後編では、さらに六区こども園が取り組む3つの特徴的な活動と、五感を刺激する園庭環境について、荻野佳子園長にお話を伺いました。



自分たちで育てたキュウリを、はさみで一つひとつ丁寧に収穫します

🌱 **遊びながら体幹をきたえる「足指遊び」**

さらに六区こども園では、中国学園短期大学の戸田先生の指導のもと、足指遊び「はだしdeサーキット」を取り入れています。平均台やジャンプ、足の指で物をつかむ遊びなど



興陽高校のビニールハウスへ。高校生に教わりながら、自分たちで選んだ野菜の苗



苗を植え、支柱を立て、毎日の水やりまで。畑の世話はすべて子どもたちの手で

🌱 **「何を植える？」から始まる野菜栽培**

野菜栽培は、「何を植える？」という子どもたちの話し合いから始まります。図鑑や買い物を通じて育てたい野菜を考え、5歳児が農業科のある興陽高校を訪問。高校生に教わりながら自分で苗を選び、購入します。園では苗植えや支柱立て、毎日の水やりまで子どもたちが担当。収穫した野菜は給食で味わい、参観日には保護者と収穫を楽しむこともあります。野菜の成長を見守る体験を通じて、食への関心や責任感、やり遂げる喜びと小さな自信を育てています。

🌱 **就学に必要な力が遊びながら身につく「硬筆」**

さらに六区こども園では、5歳児を対象に、硬筆の師範免許を持つ荻野先生による「硬筆」を始めています。目的は文字の上達だけでなく、小学校への憧れを育み、学ぶ楽しさを感じてもらふこと。ひらがなから始まる言葉を順番に発表するゲームなどを通して、語彙力や人の話を聞く力、気付きを自然に養います。子どもたちが心待ちにする人気の時間で、保護者からも「自信につながった」「好きなことが見つかった」と喜びの声が届いています。



5歳児が取り組む「硬筆」。背筋を伸ばし、集中して文字と向き合います

🌱 **岡山県全域から選ばれる園を目指して**

硬筆や野菜栽培、足指遊び、自然豊かな園庭での体験を通じ、子どもたちの「やってみたい！」を育む、さらに六区こども園。可能性を大人が決めつけず、一人ひとりの挑戦を応援します。2026年9月には内覧会と入園説明会を開催予定。地域や高校とつながりながら育まれる、新しいこども園の魅力を、ぜひ現地を感じてみてください。



大型遊具のない園庭。築山やトンネル、タイヤの階段で全身を使って遊びます

🌱 **五感と創造力を育む、自然いっぱい園庭**

園庭には大型遊具を置かず、築山や3人乗りブランコ、手押しポンプなど、子どもが自ら考え、友達と協力して遊べる工夫を施しています。四季折々の果樹や植物に触れ、見て、匂い、味わう体験が五感や創造力を育みます。さらに、果樹は災害時の非常食、地下の雨水タンクはトイレ用水として活用できるなど、防災機能も備えています。地域の造園業者や興陽高校の生徒と共につくられた、遊びと学び、防災、地域交流が一つにつながる園庭です。



高さ約2メートルの築山。ロープや石を頼りに、手足の置き場を自分で考えて登ります



園庭に植えられた果樹や四季折々の草花。見て、触れて、匂いを感じて五感を働かせます

を通じて、平衡性・移動性・操作性を楽しく育みます。子どもたちは好きな動きに何度も挑戦し、自分なりに工夫しながら、自然と体の使い方を身に付けます。年齢だけで可能性を決めつけず、「やりたい」という気持ちを尊重。友達と助け合うことで、体幹や運動機能に加え、社会性も育んでいます。



素足でおこなう「はだしdeサーキット」。障害物をまたぎ越え、体の使い方を覚えます



Careoth People Stories

CAREOTH PICKS

 VOL
 28
 2026

小さなアイデアが会社を変える！

厚労省からも表彰された

業務改善報奨制度「Cappy！」

一人ひとりの挑戦が、会社の未来を変える「Cappy！」



キャレオスには、新しい施策を前向きに捉え、挑戦を楽しむ風土があります。Cappy!の開始時は成果だけでなく、一人ひとりの小さな工夫やアイデアを受け止める制度として発信。丁寧な告知を重ね、どんな案も差し戻さず受け入れることで、応募する文化を育てました。初年度は応募案を「Cappy! BOOK」にまとめ、2年目からは実行と成果を求める制度へ発展。ハードルを上げても応募数は倍増し、社員の高いEQと旺盛な挑戦意欲が表れています。



—— 第一回からたくさんの応募があったのですか？



日々の業務から生まれる小さな工夫や成果をすくい上げ、従業員一人ひとりの励みにつなげたいという想いから「Cappy!」は誕生しました。大きな特徴は、経営トップが深く関わること。社長は応募されたすべての資料に目を通し、現場の挑戦や努力を直接受け止めています。日々の気づきを会社全体の成長へつなげる制度です。

一人ひとりの工夫や成果が
広がっていくことで
会社はもっと強くなる 人事部 加藤さん
Cappy!がスタートした経緯を
教えてください

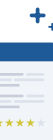
キャレオスには、全従業員が参加できる業績改善報奨制度「Cappy!」があります。個人・グループ・事業所単位で改善活動を募集し、年に一度、成果を発表・表彰します。5回目となる2026年度には1200件を超える応募が寄せられました。書類審査や役員へのプレゼンを経て、最終審査では約10組の受賞者に賞金を贈呈。この取り組みは、厚生労働省主催「グッドキャリア企業アワード2024」でイノベーション賞を受賞しました。



—— 過去に印象的だったアイデアがあれば教えてください

夢門塾では、不登校の利用者を支えるため、学校や行政と連携し、放課後等デイサービスで所定のカリキュラムに取り組むことで、学校の出席と同等に扱われる仕組みを福山市で実現しました。学ぶ楽しさを知り、高校進学へ意欲を持つ利用者も増えていきます。また、従業員同士が感謝をカードで伝える取り組みでは、承認の連鎖が生まれ、離職率の大幅な低下につながりました。利用者満足と従業員満足の両面から、現場と組織をより良くする好事例です。

—— 2024年には厚労省から表彰もされたそうですね



「グッドキャリア企業アワード」は、従業員の自律的なキャリア形成を支援する優れた企業を厚生労働省が表彰する制度です。2024年は94社が応募し、キャレオスは「イノベーション賞」に選定されました。全職員の前向きな行動を対象とする業務改善表彰制度を人事制度に組み込み、主体的な挑戦や成長を促した点が高く評価されました。今回の受賞は、従業員の自信と誇りを育み、社内一体感を高めるインナーブランディングにもつながっています。



—— Cappy!の今後の展開・展望を教えてください

現在は担当を離れていますが、Cappy!には、少しずつ形を変えながらも継続してほしいと願っています。良い取り組みを個人や事業所だけで終わらせず、実装ノウハウを蓄積し、グループ全体へ水平展開することが重要です。また、部署を越えた相互理解を促す役割にも期待しています。今後はインドネシアからの特定技能人材にも参加を広げ、先輩の活躍を励みに、日本語学習や人材育成、働く満足度の向上にもつながってほしいです。

